

Title	中国人技能実習生の日本語学習アプローチ —日本語能力試験のN1、N2に合格していない人に焦点を当てる—
Author(s)	栄, 苗苗
Citation	
Issue Date	
Text Version	none
URL	<a href="http://hdl.handle.net/11094/76323">http://hdl.handle.net/11094/76323</a>
DOI	
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 論文内容の要旨

氏名 ( 栄 苗苗 )

論文題名 中国人技能実習生の日本語学習アプローチ  
—日本語能力試験のN1、N2に合格していない人に焦点を当てる—

## 論文内容の要旨

本研究は、本稿では日本語能力試験のN1、N2に合格していない中国人技能実習生がどのように日本語を勉強していたかを明らかにしようとするものであり、「はじめ」と「おわり」を含め、11章から成っている。

「はじめ」では、調査者である筆者（以下、私）の技能実習生とのストーリーを記した。私は大学を卒業してから、中国のある技能実習生仲介会社で、日本語教師として半年ぐらい働いていた。そのとき私は、日本にいた3年間で働きながら日本語を勉強し日本語能力試験の1級に合格した技能実習生の話は初めて聞き、非常に驚いた。技能実習生は3年間で一体どのような勉強をして、日本語能力試験1級、2級に合格したのだろうか。この疑問が、私が技能実習生の日本語学習について研究しようと思った出発点であった。私は、修士課程で日本語が上達した技能実習生の日本語学習に関する研究を行ったが、博士課程では、技能実習生の日本語学習をより全般的に見るため、日本語能力試験1級、2級に合格していない技能実習生の日本語学習アプローチを課題にした。

第1章「研究の背景」では、世間あまり注目されない外国人技能実習生について紹介し外国人技能実習生が生まれた背景を述べ、技能実習の制度の変遷について整理した。そして、技能実習生にまつわる社会問題をまとめ、その後、技能実習生の要求される日本語能力、技能実習生が求める日本語能力と彼らの実際の日本語能力にギャップがある問題について述べ、技能実習生の日本語に関する研究の知見を踏まえうえて技能実習生の日本語学習の問題を提示した。そこで、本研究では技能実習生の日本語学習の実態を把握し、彼らの日本語学習をより深く理解するために技能実習生一人ひとりの日本語学習アプローチに注目することを述べた。

第2章「理論的枠組み」では、本研究の課題に取り組むための理論的枠組みを定めた。まず動機づけの概念について紹介し、本研究で用いる動機づけ（motivation）を、動機を成就させるプロセスとして捉える立場を示した。その後、第二言語研究分野における動機づけの理論について整理し、SLA研究における動機づけ研究の流れを説明し、本研究の理論的枠組みであるDörnyei（2005, 2009a）が提唱した第二言語動機づけセルフシステム（L2 Motivational Self System）を述べた。

第3章「方法論」では、本研究で用いる混合研究方法について述べた後、混合研究方法を用い、本研究における量的アプローチのリサーチ・クエスチョン、①日本語能力試験のN1、N2に合格しなかった中国人技能実習生にはどんなタイプの学習者がいるか②彼らの日本語学習の概況はどうなっているかと、本研究における質的アプローチのリサーチ・クエスチョン①日本語能力試験のN1、N2に合格しなかった中国人技能実習生はどのように日本語を勉強していたのか、②彼らの日本語学習における動機づけはどのように変化したのかに設定した。最後に量的研究と質的研究を行うときにそれぞれ使った研究方法である潜在クラス分析とケース・スタディを紹介した。

第4章「調査概要」では、本研究で行った調査の概要を示した。まず、量的調査であるアンケート調査の調査目的、アンケートの構成、実施概要を記して、量的データの分析結果を示し、質的調査の概要を記述した。

第5章「クラス1」、第6章「クラス2」、第7章「クラス3」、第8章「クラス4」では量的調査結果に従い、分類した各グループから選ばれた協力者それぞれ2名、計8名のケースとケース内分析、ケース間分析に対する考察を示した。趙さんと銭さんは共に日本語研修と講習でしか日本語学習を行っていなかった。一見似た条件であったが、2人は全く違う学習を行っていた。2人は日本語学習において技能実習生になる以上、受けなければならないというL2義務自己を持っていたが、趙さんは消極的な態度で授業を受けていたのに対して、銭さんは積極的かつ自主的に努力していた。孫さんのケースと李さんは日本語研修と講習において2人とも真面目に日本語学習を行っていたが、それぞれの学習動機づけは違う。周さんと呉さんは日本語研修期間においても講習においてもそれから技能実習中においても真面目な日本語学習を行ったが、努力する理由が異なっていた。周さんの場合L2学習経験の環境要素が重要な役割を果たした。一方、呉さんの学習において明確なL2義務自己は学習全体を貫いていた。鄭さんと王さんの日本語学習においてはL2

義務自己が重要な役割を果たしていた。

第9章「8人のまとめ」では、協力者8人の日本語学習アプローチに表した「学習環境」、「L2理想自己」、「L2義務自己」3つの要素の関係を示した。「学習環境」は「L2理想自己」と「L2義務自己」の形成に深い影響を与えると同時に、「L2理想自己」と「L2義務自己」の実現にも影響を与えた。まず、本研究の協力者が持っているL2義務自己とL2理想自己はすべて彼らを囲む学習環境から生み出され、環境とともに変化すると考えられる。次に学習環境は8人のL2理想自己とL2義務自己の実現、つまり学習活動に影響を与えた。L2理想自己とL2義務自己を成功に導く環境があれば、それらの実現に阻害を与える環境もある。8人が受けた日本語研修及び講習の仕組みはほぼ同じであるため、ここでは8人がそれぞれ違う技能実習に入った後、彼らを囲む環境からL2理想自己とL2義務自己の実現への影響を見る。

また、協力者8人の日本語学習アプローチにおいては「L2理想自己」より、「L2義務自己」の方が大切であった。

最後「おわりに」で、本調査の意義及び今後の課題を記した。

## 論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 ( 栄 苗 苗 )			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	大阪大学 教授	BURDELSKI Matthew James
	副 査	大阪大学 教授	石井正彦
	副 査	大阪大学 准教授	高木千恵
論文審査の結果の要旨			
以下、本文別紙			

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： 中国人技能実習生の日本語学習アプローチ  
-日本語能力試験のN1、N2に合格していない人に焦点を当てる-

学位申請者 栄 苗苗

論文審査担当者

主査 大阪大学教 BURDELSKI Matthew James

副査 大阪大学教授 石井正彦

副査 大阪大学准教授 高木千恵

【論文内容の要旨】

本論文は、グローバル化が進んでいる中で日本に出稼ぎのためにやってきた中国人技能実習生に焦点を当て、日本滞在 3 年間で終わって中国に戻った調査協力者を対象にし、量的・質的な分析を行い、複数のケース・スタディの観点からそれぞれの協力者がどのように日本語を勉強していたか、また協力者の日本語学習における動機づけはどのように変化したか、を解明することを目的とした実証的研究である。「序論」と「おわりに」を含め A4 判 158 ページからなっている。まず、第 1 章「研究背景」では、技能実習の精度の変遷を整理し、技能実習生にまつわる社会問題をまとめ、技能実習生の日本語に関する研究の知見を踏まえた上で技能実習生の日本語学習の問題を提示している。第 2 章「理論的枠組み」では、動機づけの概念を紹介し、第二言語研究における動機づけの理論を整理し、特に本研究に最も重要である Dörnyei(2005, 2009)が提唱した第二言語動機づけセルフシステムを説明している。第 3 章「方法論」では、混合研究法を述べた後、リサーチ・クエスチョンを挙げている。第 4 章「調査概要」では、量的調査であるアンケート調査の目的、アンケートの構成及び実施概要を説明し、本調査の 158 名からアンケート調査で得られたデータに基づき、質的調査の概要を記述している。第 5 章「趙さんと銭さん」(クラス 1 計 10 名)、第 6 章「孫さんと李さん」(クラス 2 計 11 名)、第 7 章「周さんと呉さん」(クラス 3 計 60 名)及び第 8 章「鄭さんと王さん」(クラス 4 計 30 名)では、分類した各クラスから選ばれた代表的な協力者それぞれ 2 名ずつ(計 8 名)を選択し、質的調査を行っている。第 9 章「8 人のまとめ」では、インタビュー調査に協力した 8 名の日本語学習アプローチに表した「学習環境」、「L2 理想自己」及び「L2 義務自己」という 3 つの要素の関係を示している。「学習環境」は「L2 理想自己」と「L2 義務自己」の形成に深い影響を与えたと同時に「L2 理想自己」と「L2 義務自己」の実現に影響を与えたと説明している。なぜなら、協力者が持っている「L2 義務自己」と「L2 理想自己」は、すべて彼らを困む学習環境から生み出され、環境とともに変化し、学習環境は 8 名の「L2 義務自己」と「L2 理想自己」の実現、つまり学習活動に影響を与えたであろうと考えられる。「L2 義務自己」と「L2 理想自己」を成功することに導く環境があれば、それらの実現に障害を与える環境もあると議論している。8 名が受けた日本語研究及び講習の仕組みはほぼ同じであるため、ここでは 8 名がそれぞれ異なる技能実習に入った後、彼らを困む環境から「L2 義務自己」と「L2 理想自己」の実現への影響が見える。また、8 名の

日本語学習アプローチにおいては「L2 理想自己」より、「L2 義務自己」の方が大切であったと提案している。最後に、「おわりに」では本調査の意義及び今後の課題を記している。

#### 【論文審査の結果の要旨】

近年は、第二言語学習の過程における動機づけは様々な社会的・心理的要素に影響を受けることが認識されるようになった。この視点から本論文は、半構造化インタビュー調査を通して、協力者の日本語学習に関する教室内外の活動や日常生活に着目することで、協力者の来日前の準備と日本滞在中の経験について語ってもらい、実際のデータからの多くの事例を挙げながらストーリーをしているところを評価できる。ストーリー化をすることで、協力者の第二言語習得の過程に助けになったことや妨げになったこと、また故意に学んだことや偶然に学んだことが明らかにされている。そして、協力者のケース間分析を行い、彼らの第二言語のアイデンティティと動機づけに関する「理想自己」や「義務自己」のあり方がどのように第二言語学習の過程およびその変化に貢献したのかを分析しているところも評価できる。

ただ、本論文ではそれぞれの協力者の日本語学習の過程と動機づけが試みられているが、考察が読者にとっては物足りないと感じられる。特に動機づけの変化による包括的な結論および日本語教育や日本語学習に与える示唆は何かという疑問が残る。また、本論文がネイティブスピーカー（日本語母語話者）のチェックが済んだものの、誤字・脱字が少なくないという難点である。

とはいえ、本論文は従来焦点に当てられてこなかった現在の日本社会・経験に重要な貢献をする外国人技能実習生に着目し、協力者の日本語学習の過程を探求する一つの重要な研究であり、研究者にとって参照すべき論文となることは間違いない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。